

# 私と水球と人生

ガネフォ水球

房野 康 滋 (79歳)

(日本大学出身)

1961年 ユニバーシアードでブルガリア遠征

1963年 ガネフォでインドネシア遠征

1965年 桑原重治君（成城大学出身、東京とメキシコの2つのオリンピックに出場、ガネフォに出場した桑原和司さんの弟）とヨーロッパへ武者修行。

その3度目が決定的なものとなり日本へは帰らず・・・。

もう51年もスペインのカタルニアで生涯を過ごすという脱線人生になりましたが、私はこれで満足しています。人間最大の目標は幸せになるということ。私はそれを達成していると自負しており、人生を楽しんでおります。

さて、それにしても日本を飛び出した武者修行僧の二人は、25歳前の怖いもの知らず。ヨーロッパへの片道運賃の工面だけをして横浜から船に乗り、いざ！ハバロフスクへ。

行けば何とかなる！ 私達には水球がある！

ダメなら帰りはどこかのタンカーにでも頼み込んで皿洗いしながら帰国だ！とばかり、それ以上の心配をせず船出。やはり何と言ってもその自信の土台は『水球』です。『水球』があるから日本を飛び出したのです。『水球』があるからこそ、こちらでプロコーチとして成功し、人生の基盤を作り、ここまでやってこられたのです。まずは大雑把（おおざっぱ）にですが、結婚当時の事から書いてみます。

ドイツの水球クラブでプレーをさせてもらいながら1966年冬に休暇をとり、スペイン旅行をした時のこと、グラナダ（南スペイン）でこれまた冬の休暇で旅行していた妻とそのグループと知り合ったのが脱線人生の始まりです。その半年後、ドイツから彼女の町へ彼女に会うためにやって来ました。そこでなにがなんでも彼女と結婚するのが私の人生の基本条件と決断。1968年春ドイツ生活に終止符を打ち、彼女の住む町COSTA BRAVA（コスタ ブラバ）のLLORET DE MAR（リオレット デ マー）にやってきました。その年の師

走には結婚。当時この町の人口は3,500人、観光事業がどんどん広がっていく時代でしたが、まだ漁師も残っていた頃です。現在では100%観光業に依存しています。人口も4万人を突破しています。当時、冬は暇なので軽い気持ちで「冬だけでも水泳コーチを」と始めたのですが6年間と長くなってしまいました。場所はバルセロナオリンピックでボートの競技場になった湖のある町、BANYOLES（バニョレス）というところ。ここでは毎年2,200メートルの湖での遠泳会が行われ、全カタルニア地方と南フランス地方から2千人以上の参加者があり、今年で75周年を迎える重要な伝統行事となっております。私も30年以上続けて参加しており、最低でも80歳までは続けるつもりと公言までしています。

プロは後にも先にもこのBANYOLESだけになりましたが厳しくも大変幸せなプロ生活でした。

以下、これまでの出来事を長くなりすぎないようにと心得ながらプロのスタートから箇条書きにしてみます。

## 1. 最初の試練はカタルニアジュニア一競泳選手権

15歳の女子選手4人を連れてバルセロナ近辺の温泉町に2泊3日。初日その町を知るために夕食後みんなで夜の散歩。そのあと『はい、早くお休みー』と皆を寝室に送り、私はその階の小さなロビーで書類の整理・・・と見せかけて選手の監視。案の定、しばらくすると、そおーっとドアを開ける気配。私が近くに座っているのにびっくりしてドアを閉めるのがわかりました。夜の外出のためのエスケープが目的。私は知らん顔して真夜中までそこを動きませんでした。翌日は何もなかったようにその話もせず試合に挑みました。

さて試合後の家族とクラブの反応に私が面喰いました。フサノの責任感にみんなが驚いているのです。普段はそこまで選手を監視することなく泊りがけの試合となると夜はコーチがまず夜の外出をして選手管理はクラブの引率者に一任するのが普通らしいのです。私は引率者なしの一人でしたが、若い娘さんを預かる責任を十分に感じていたので当然のことと思っていました。それがとっても新鮮な空気をクラブに吹き込んだようです。そのことはカタルニアのスポーツ新聞にまで報道されたぐらいです。プロとしての好スタートでした。

## 2. 2軍から1軍へ昇格

水球クラブはベテラン選手がいなく、15歳以下の若い選手ばかりでしたが、私の「水球熱を感じたのか？」日々、ベテラン選手も一人一人プレーに戻ってき

てくれました。15歳が中心となる少年チームは大人チームの階級に従ってプレーをしますが（毎試合ですから大人チームと少年チームが別々に試合）2軍では抜群の成績で断トツ！大人チームは2軍の「2位」。

2位は1軍の下から2番目のチームと入れ替え戦をやりませう。2年目も同じ。3年目はもう若い選手を中心にして戦いました。そして2軍で無敗の成績を収めました！・・・が、この年にルールが変わり、これまで「2軍の1位は自動的に1軍に昇進」していたのが、この年だけは「1軍のチーム数を整理するために、1軍の下から3番目のチームと2軍の1位とが入れ替え戦」をするという羽目になりました。



それでも無事勝利して1軍に昇格。選手平均年齢17歳は国内で一番若い1軍チームだったので。私の会心の一戦でもありました。

私の持論 『試合は体力・技力が半分、あとの半分は心理学』

それをそのまま実現させることができました。

後列左端 （私） 房野

### 3. クラブの伝説になった水球武者修行旅行

当時、湖には毎年フィンランドの水上市スキー代表チームが合宿に来ていました。そのコーチと仲良くなり話しているうちに一度フィンランドに来るよう誘われました。そのコーチはヘルシンキから250キロほど北にあるJYUVASKYLA（ユバスキラ）という町のホテル経営者だったので『宿泊費は無料』と言われ、売り言葉に買い言葉でフィンランド行きを即決。選手たちにそれを報告しましたが、あまりに急なことで最初は信じてくれませんでした。

『〇月〇日にストックホルムから〇時頃フェリーに乗って、フィンランドに向かう』と具体的なことを説明して、やっと信じた様子。皆、小躍りして家に知らせに行きました。でも、私はあとで妻に何と言おうかと悩みましたが、もう後の祭り。長男出産直後の話でしたから・・・。

生後2か月の息子を抱えて妻のご立腹は大変なものでした。（蛇足ですがその後、妻とはこの話は長年禁物でした。その旅行の25周年記念会が催されましたが、その時初めて妻も同伴してくれてこの話は水に流してくれるということにな

りました。)

さて、その旅行準備に選手たちはおおわらわ。『私は一切準備にはタッチしないから皆で決めるように』と言い渡しておきました。当時は国が変わるごとにお金も変わるのでそれだけでも手間のいることでした。私を含めて全員16名。小型自動車4台（セアット3台。シトロエン2馬力1台）に乗り込み、足を上げようものならもう降ろす場所がなくなるほど“ぎっしり”と食料を詰め込み出発準備。

車の点検に行けば『皆気が狂っている！こんな車で何千キロも走るのは無茶だ！！』と、修理工にあきれられました。

初日バーゼルで野宿し、2日目には私のお世話になったドイツの水球クラブ“ハム”で親善試合をしました。クラブの責任者は私一人なのでびっくりしていました。そのあとスウェーデン、ストックホルムでも試合をしてフィンランドに渡りました。ユバスキラに泊まりながらヘルシンキまで車を飛ばし試合にも行きました。

もう距離感が無くなるほど車で走って、走って、走りまくり、家に着くころには車の排気筒が焼け落ちてしまって、まるでF1の車みたいにもものすごい雑音でした。1974年8月の事でした。

余談になりますがこの時のチームメンバーの一人は、今では医学界で世界に名を馳せている「心臓の名医」が16歳で参加していました。BRUGADA（ブルガーダ）3兄弟の一人で、急に止まった心臓にショックを与えて生き返らせる器具を発明。スポーツマンも原因不明で運動中にその場で心臓が止まり急死というケースがよくありました。今ではどのスポーツ施設にもこの器械は設置されています。日本でも普及していると思います。国際会議に参加すると日本人医師からサインを求められることも多々ある、と本人が言っております。私たちの、クラブの、誇りの一つです。

この旅行の約4か月あとの新年早々に前記の入れ替え戦があったのですが、それまで全員、実に和気あいあいと一致団結し、とってもいい練習ができました。普段では不可能な元旦の朝に練習という私の指示にも、みんなが理解して一人残らず参加。私が面喰ったほどでした。この旅行のおかげです。こんな形で1か月近くも若い選手たちを連れて7000キロも走り回ったというようなことは後にも先にも聞いたことがありません。クラブの伝説にもなっています。今でもよく思うのですが、よくあんな事をやったものだと・・・。

その答えはやはり私は「いくらヨーロッパ人になっても根は日本人、なにか真剣に考えるときは日本人、おまけに水球で鍛え上げられた日本人だからだ」とい

うことでしょう。

仕事一途でやろうと思えばもう猛進してしまう。家族のことが後回しになってしまう。

#### 4. プロコーチとしての思わぬ出来事

このクラブの経験で「この仕事は独身者のする仕事」と見受けましたので（小さなクラブで競泳、水球、両方手掛けるのはただ事ではありません。）私の人生計画であった日本相手に仕事をするということを常に頭に入れての事でした。前記の『あっぱれ1軍に昇格』のすぐ後でした。競泳の練習を見ているとき、プールに訪問客が来ました。

スペイン水球発祥のクラブ「ナショナルチーム」といえば全員そのクラブから、という時代が長く続いていた名門CNB（バルセロナ水泳クラブ）の人。話を聞くと「彼のクラブにコーチとして来てくれないか」と頼みに来たというのです。一瞬自分の耳を疑いました。が、私はいつこの仕事を辞めようかと思っている矢先のことでしたので

『ここを辞めた後は、ほかのクラブに行く気は無い』

とその通りの話をしました。

その人もその旨クラブに伝えるからということで別れました。それっきりその話は私がはっきりと断ったので終わりになったと思っていました。・・・がしかし、その後さらに驚くべき話が入ってきました。

それは水連の今でも著名な人であり、私の友人でもある人が憤慨して私に話を次のようにしてくれました。

彼が憤慨していたのは「私のプロコーチとしての将来」を思っただけのことでした。CNB、と私のクラブ（CN Banyoles）が裏面で紳士協定をして私をクラブから引き抜かぬという約束をしていたそうです。『私の裏面でけしからん』と穏やかな彼が大変怒っていました。私は辞める腹でいましたから名誉ではあるが気にはしていないと彼をなだめました。

が、さらに私がびっくりしたのは・・・CNBはコーチとして二人を候補に上げていたとか。

一人は私。もう一人はナ・ナ・ナ・ナント！

元ハンガリーの世界の水球アイドル花形選手 “マルコビッチ” という人。当時キューバでコーチをしていたと記憶しています。

「その人か私か」と検討していたというのですから、これは聞き捨てならぬ私の大名誉だと“感激”しました。世界に名の知られている人と私を同格にしてくれたのですからただ事ではありません。

プロは6年間やりましたがなんと言ってもこの出来事がプロとしての最高のご褒美でした。誇りに思っています。

## 5. プロコーチとしてのもう一つの出来事。

これはまったく個人的なことですが、やはり1軍に昇進してからのことです。「ここが潮時」と思い一度クラブとその話をしました。クラブは『何が何でも辞めないでくれ』と言うので、私は話し合っていてはきりがないとばかりメチャクチャの給料を提示して『これを払うならクラブに残る。そうでなければ辞める。』と切り出しました。もちろんそうすればクラブも諦めるだろうと思っていたのです。でも数日後にクラブはナント『払うからやめないでくれ』と返事してきました。こちらがビックリしました。妻までが『そんな無茶な金額を言うな。』とびっくりして反対したぐらいです。それが実現したのは・・・

クラブの横にボート部があります。当時そのクラブに大変なスポンサーがついていてお金を湯水のように使い、外国からコーチを呼び、ナショナルチームを年中ホテルに泊めて合宿させていました。キューバ革命で政府よりお金を持って亡命したという大金持。その人に水泳部が泣きついてクラブが払えぬ分を助けてもらったらしい。

とにかく私もこれで辞めるということができなくなり、家族も呼び、腰を据えてさらに3年間コーチを続けました。

聞いた話ですが当時スペインの最高給料取りコーチの額を知らされ、私がお金の60%も多くもらっていたことが分かりこれまたビックリでした。

## 6. 自分の町で水泳教室

1978年にプロコーチを辞め、その翌年からホテルの小さな室内プールを借りて水泳教室を始めました。試合も何もなく、ただ泳ぎを教えるだけ、ですから実に気楽で楽しいものでした。プロの時はまさに24時間水球の事、競泳の事、頭から離れず考えてばかりの生活で厳しいものでしたから、余計にこの教えるだけの水泳教室が楽しく感じたのでしょう。初年から生徒でいっぱいになり、空席待ちが出るほどになりました。まさに町の半分は私の生徒、もしくはその家族だったみたいでした。以前は私のことを『ペピータ（妻の名前）と結婚しているあの中国人（日本人とはまず言われない）』ということでしたが、このころあたりから逆に妻のことを『フサノの奥さん』という風が変わってしまいました。

月曜日は準備している日本との仕事で一日中どこにでも自由に出かけられるようにしておいて、火曜日～金曜日の午後5時間、土曜日の午前3時間を水泳教室

でございました。私は教えるのが楽しくて、週末から月曜日までプールが休みなのが物足りなく思うぐらいでした。いつも休暇などいららないと言っていたぐらいです。

4年目の1982年夏に生徒を主体とした1kmある町の湾で「遠泳会」を始めました。これもあと数年で40年になります。もうすっかり町の伝統行事になっています。最初は20人ぐらいの参加者も、今では200人を超えるようになっています。

1989年には日本との仕事も忙しくなりプールと仕事の両立が難しくなったので閉鎖しました。

1993年には町の水泳部を設立。1994年から寒中水泳も加えました。

これは私が京都の踏水会でした経験を生かしてのことです。『気でも狂ったか。』とばかりの反応がほとんどでしたが、若いクラブの連中は最初から前向きに協力してくれました。

元旦にやる予定でいしましたが大晦日は多くの人が徹夜で飲み食いして騒ぎ、そのまま寒中水泳ということになると健康上の危険も伴うので1月の第二日曜日にすることを慣例としています。

最初はやはり水泳部の者だけの10人ちょっとの参加者でしたが、今ではやはり200名近くになっています。これは目立つ行事なのでそれを利用して町中の注意を引くように『室内プールが出来るようになるまで寒中水泳は止めない。』

と大々的に宣伝したものです。

町では「水泳といえばフサノ」ということで何かにつけて私が引っ張り出されましたが、沢山のいい協力者が出来ていたのでプール建設のための市役所とのやり取りは町の人たちの強い後押しもあり効果的でした。

年月はかかりましたが2010年に工事開始、2014年にはオープンにこぎつけられました。私が水泳教室を始めてから35年近くも経ったわけです。もっと正確に言えば私の耳に『室内プールが出来るからコーチになる腹積りでいてくれ。』というニュースが入ってから50年近くになるのです。



それは1968年の私の結婚式の日に関心から言われたのが始まりです。



## 7. プールの5周年記念行事

行事が先日（2019年3月24日）行われました。その1週間前に『市からフサノへの小さな記念品を渡す行事があるから午前11時頃にはプールに居てほしい。』と知らされました。気楽に『ああいよいよ。』と返事をして、それを妻にだけ知らせておきました。小さな贈り物だからと気にもしないでしたのです。

当日プールについてビックリ！

市長から前市長、市の幹部、クラブの役員から選手、私たちの娘、息子家族までが来ていたのです。

なんでも数か月前から話が広がっていたそうです。大変なサプライズ！

そして、小さな記念品とは、確かに小さいものでしたが名案で心温まるものでした。

「プールの5コースは房野のコースに指定され、スタート台に私の名前入りの記念板」が張り付けられました。（下の写真）

あふれんばかりの皆の私に対する好意がこの日はいつもに増して強く感じられました。これまで何十年も町の水泳の発展に、また室内プール建設の呼びかけを皆と共に尽くしてきたことが、皆にこうして愛され尊敬される要素となってこの日を迎えたものと思い、感極まりました。

他国に飛び込んで、こうしてこちらの生活に溶け込み、皆からの好意を感じながら生きられるというのは幸せなことです。すべての基礎は水泳のおかげです。この日の市長のフェイスブック記事を参考までに付記します。

「たった今私たちが払っても払いきれないことをやってくれたリオレットの1市民のための記念行事をやってきました。半生をかけてリオレット市民に泳ぎを教えてくれ、市の水泳発展のために尽くしてくれた人物です。



ありがとう、フサノ！

今日から市のプールの中央コースは永久に彼の名前が付きます。さらにCISCO MARQUES (彼と私二人で水泳部設立) OLGA VALLS (私の後を継いだ2代目水泳部会長。私の水泳の教え子) 他水泳部の皆さんたちにもお祝いの言葉を捧げます。」



## 8. 日本の水泳、水球と私

1965年に日本を飛び出してから18年間帰国しないままでした。生活との戦いに夢中だったのでしょう。「気が付いたらそんなに経っていた」という感じでした。妻と話しながら『オイもう18年にもなるんだ、急いで帰国しよう。皆にも挨拶もしなければならぬし。』とばかりに急遽帰国したというのが本音でした。1983年の夏でした。

東京での皆さんへのご挨拶を終えて京都に帰っていた時の事です。筑波大学の水球監督の坂田先生から連絡が入ってきました。桑原重治君（日本と一緒に飛び出した私の生涯の相棒）から聞いて連絡してきたとの事。『以前からスペインの水球に注目しており、何とかスペインに行ってみたいと思っているのだが協力してもらえるか？』との事。もちろん私は快諾。

これが私の日本との水泳、水球との関係が深まるスタートになりました。

2年後に筑波チームが第1回目の来西。その後2年ごとに遠征してきました。

来ない年にはこちらの選手、監督を日本に招待するという企画を立てられ永年実行されたものです。それらのことを実行するには選手たちの大変な努力がありました。

「夏休みはアルバイトしてお金をためて遠征」とスペイン選手を日本に招待する資金を作ったのです。

こちらの選手、監督にとっては「日本に無料で行ける」という、願ってもない棚ボタ式旅行。おかげで両国水球関係はこの上もなく親密な友好関係が出来上がり、日本に行った選手、監督はメチャ日本ファンになってくれ、色々な行事を実現することができたものです。

日本選手のスペイン短期、長期水球留学をした選手も多く出てきましたが、それが出来たのもこの交流のおかげです。

それが約20年続きました。20年で出来上がった人間ピラミッドはもう巨大なものになっていました。

坂田先生が定年退職されてからはしばらく停滞していましたが、それを受け継いで新たに岐阜の大垣高校の白浜先生が数年後に遠征を再開。

白浜先生は筑波大学の当時の選手だった人。交流再開してもう10年以上になります。大学生チームとは違って交流システムももっと積極的に企画。ただ来西して試合をして、というだけでなくホームステイ形式で来西中はこちらの選手の家庭に宿泊して選手一人一人がこちらの家庭の一員として行動するというもの。

その翌年はこちらのチームが大垣に行き同じく選手の家で宿泊して日本の生活

をします。これは大好評で大垣もこちらのチームも手ぐすね引いてそれを待っています。この4月中旬の春休みにはこちらのチームが大垣に行きます。

大垣チームは私の町で行われる年末国際水球ジュニアトーナメントには2016年、2018年に参加してくれており、この年末には白浜先生率いる日本ジュニア代表チームがそれに参加してくれる予定になっています。

それやこれやをやりながら、もうかれこれ35年になります。その間こちらに来た選手、日本へ行った選手、監督、の数は数え切れません。数百名どころではないでしょう。沢山の選手が長・短期、水球留学をしていきましたし、日本の水球界にも何らかの形でその足跡が残されているものと信じています。

一つだけ両国の間に入って協力させてもらっている経験から教訓らしきものを得ています。

それは、「若者への協力は適度に周りの者もコントロールしないとイケない」ということ。

万事全て受け入れOKでやるのは長い目で見ると大きなマイナス面が出てきます。それが当たり前になってしまって、逆に面倒見ろ、と言わんばかりになってしまいます。ほとんどの選手は開拓精神旺盛で立派に選手生活も社会生活もこなして帰国していくのですが、中には日本を代表しているという目で見られているということすら理解せず、気が向くままのわがまま生活を送り、周りを困らせてしまうことまで起こるのです。水球留学実現のために協力してくれる両国間の無数の人たちに、中には受け入れてくれるクラブにまで、まさに顔に泥を塗りつけるようなことをしても知らん顔、という者まで出て来るのです。ですから協力も長すぎず、短すぎず、わきまえて行かないと本人をも含めて誰のプラスにもならないということなのです。

## 9. バルセロナ オリンピック

1992年のバルセロナ五輪は、私も喜んで協力させていただきました。

五輪の2年ぐらい前から日本水泳チームがこちらに遠征。水連役員の方々ともお知り合いになり、私の協力を約束。五輪の前から終わるまで50数日間、付きっきりのお手伝いをさせていただきました。水連への協力約束の印に「水連古橋会長」の名で委嘱状なるものを頂きました。これは今でも記念に残してあります。日本水泳界へは「お返しあるのみ」と、もちろんボランティアです。

水球は五輪参加資格が取れず、残念ながら競泳、飛込、シンクロだけのお手伝いということになりました。

私のお手伝いの公式名目は「I O C 古橋会長の秘書」ということでしたが、古橋会長からは『とにかく日本チームと一緒にいてくれ、私は日本から秘書を連れて来ているから。』ということで、選手、コーチの皆さんと一緒に過ごしました。

合宿は南フランスのナルボルンとピレネーにある高地練習プールのフォントロメウというところを車で行ったり来たり。まさに24時間一緒。五輪が始まってからはバルセロナでも食事案内まで含めて一緒でした。シンクロの練習場の確保や変更という役も回ってきました。花形選手がいたため報道陣を避けるプール変更の必要も生じたりしました。こういう時は私のプロ時代の経験が役に立ちました。バルセロナ中のプールのあり場所を熟知していたからです。

なんと言っても岩崎恭子ちゃんの200メートル平泳ぎ金メダルはだれもが予想していなかったこともあって、本当に嬉しい驚きでした。観覧席にいたコーチたちまでが150メートルからゴールまでの間『あれっ？あれ！あれっ！！』と驚きの叫び声をあげるだけ。いかに予想外であったかが分かります。

私個人として心に残るのは決勝前の恭子ちゃんが控室で床に座り込んで一人で待っていたところを私が場所を間違えて通りかかり見たこと。五輪の決勝という大プレッシャーの中にいる中学生の姿にまさに“ドキッ”として胸が痛む思いでした。激励の声をかけたかどうかとも記憶にないぐらいこのシーンに強烈な印象を与えられました。

五輪後の帰国解団式に至っては副会長の小林徳太郎氏が開口一言、『今回の成功、金メダルは、ひとえに房野氏の協力のおかげ』とまで言われたそうです。複数の方からその報告を頂きました。これはまさに大名誉です。日本水泳連盟に少しはお返しもできたと本当に心から嬉しく思いました。その後も故古橋会長は事あるごとに『それは房野君に頼みなさい』と言われていたそうです。

## 10. 日本との貿易仕事

これは私の長年のアイデアであり、試さずには私の人生は終われないというものでした。プロコーチを辞めてからすぐ準備に入りましたが思った以上に時間もかかり10年近くも経ったのでしょうか。1980年前頃にまだパソコンもなく、全て郵便が頼りでしたから時間ばかり過ぎていくという感じでした。バルセロナ五輪という幸運が私個人にも舞い込み、日本もバルセロナブームに乗り、仕事も軌道に乗ってくれました。が、それを前後して日本も欧州も不況に見舞われ仕事を続けるには当時唯一の可能性として見えたのは中国の市場開拓ということでした。

私の日本との仕事は仕事半分、あとの半分は友達と会うことでしたので、年に2回の訪日も楽しいものでした。今更あえて中国に入り込むという気持ちには毛

頭ありませんでした。

定年の頃には引退同然でしたが、細かい仕事が残ったままで実質的に日本との仕事がきれいに終わり100%定年退職出来たのは2012年、72歳の時でした。ここまでこうして活躍できたのもこれまた日本の水泳関係の後輩、同輩、先輩、のお陰で皆さんに“寄って、たかって”助けて頂きました。仕事をどっさりと頂いたケースもありました。本当に皆さんのおかげで私も貿易仕事の真似ぐらいは出来て腹の虫も収まったものです。

陰に陽にお世話になった皆々様に心から感謝いたしております。

## 11. これが一番幸せ

最後に水泳とは関係のないこともあります。私の此方での生き方の説明を補充するためにいくつかのことを付け加えてみたいと思います。

まず私の生き方の基本はこちらの人間になりきるということ。

『郷に入れば郷に従え』ということ。

それは日本人であることを忘れてしまうということではありません。全く逆です。こちらの文化の良さが分かればわかるほど日本の良さも分かってくるということは間違いありません。その証拠に私は日本にいる頃よりも今のほうが比較にならないくらい日本のことを誇りに思っています。30歳代のプロコーチ時代は私をカタルニア人として鍛え上げられるいい試練の時代でした。練習では子供たちには私が何人でも関係ありません。自分の意見、主張をどんどん言ってきますし、まさに毎日が戦争でした。6年間で水泳、水球を教えて私はカタルニア人になることを教えられたというところ。40歳代には遠泳会を初めてこちらの社会生活に参加し始めました。50歳代にはカスティリア語（スペイン語）からカタルニア語に切り替えました。これは私にとっては、というよりこちらの人間にとっては大変重要なことで「この人間は本当にカタルニア人になり切っている」とばかりに心の扉をさらに開けてくれるのです。60歳代にカタルニア民謡踊りのサルダナスを踊り始めました。今ではその先生として冬にはサルダナス教室を市の行事として催しています。もう10年ぐらいになるでしょうか。70歳代からはカヤックをやり始めコスタブラバの海岸の美しさを満喫しております。

さて、こうして日本人、カタルニア語、サルダナス、の3つが揃うと痛快なことが多々あります。私はカタルニア人として何気なくやっているのですが慣れない周りの者にはそうは見えないことがあります。夏の夜、毎週末に市役所広場でサルダナスの踊りがあります。

町の人には慣れているので私の音頭で踊るのですが、それを知らない人は目をパチクリ。『なんだあの人、えっ？日本人！日本人が指示しながら踊ってるの！』ということになり、自分の町に帰ったら話のタネになると記念写真を頼まれることまであります。この踊りは音楽が変わるたびにステップを変えるところが違って来るのでそれをマスターする人が少なく、どうしても私にその役が回ってくるのです。見慣れない人達にはそれがとっても目新しく、珍しく見えるようです。

他にもこの珍しい存在さから避けられないこともあります。報道関係の目にもとまることもあり、新聞、ラジオ、TV、などにも引っ張りだされることもあります。市の報道局が外部からの問い合わせに、すぐに私の名前を言うてしまうのです。まあ珍しさの代償として仕方ないことだとも思っています。私は外人という意識はもうないのですが、町の人からはそれやこれやで私のことを「カタルニア人よりもカタルニア人」だという評判を得ています。私が常日頃、人の好意を感じながら生きられるというのも、水泳以外にこうしたことも大いに影響しているものと信じています。

良く聞かれることですが、『日本かこちらかどっちがいい？』という質問。

私はいつも『どっちもいいし、どっちも良くない。』と答えることにしています。日本でも同じ答えをします。一つの国は一人の人間と同じことで、良いところもあれば悪いところもある。理想の人間がいなのと同じように理想の国というのもない。それをどうとらえるかは自分次第。

私は『自分のやっていることが一番いいんだ。』と言うのが常です。『両国に片足ずつ突っ込んで、良いところだけを取って生きている。これが一番幸せだ！』と。

そういう思いから日本の選手のお役に立てるようにと、協力させてもらっております。

根本は『そうして他の国をもよく見て世界は日本だけではない、自分の好きなところを選んで生きればいい、若いうちにその基盤を作ればいい。』という気持ちでやっております。

こうした協力も私の人生と同じでどんなに頑張っても微々たる事しか出来ないことは分かっておりますが、それでもゼロでもないだろうと思ひながら・・・。